

## 直観とそれを隠れて支えているもの

——「直観と倫理」へのフッサール現象学からのアプローチ——

浜 渦 辰 二

はじめに

フッサール現象学は、その出発点において直観主義を標榜していた。それは、記号的な思考を本来的な直観という起源へと基づけようとした処女作『算術の哲学』（一八九一）が、当時の数学基礎論の直観主義と通底するものであったことや、超越論的現象学のマニフェスト『イデーニー』（一九一三）でも、「自体を与える直観がすべての認識の権利源泉である」こと、「そこで与えられるものを与えられるがままにそのまま受け取らねばならない」ことを「あらゆる原理の原理」であると宣言したことに現れている。現象学のモットーとして膾炙した「事象そのものへ！」や、何よりも「見ること／直観すること」

を学び直さねばならないという教訓も、ここに繋がり、与えられたものを記述することこそ現象学だとする理解もここに由来する。

とは言っても、彼が直観と呼ぶのは、感性的直観のみならず範疇的直観（『論理学研究』一九〇〇）ないし本質直観（*Wesensanschauung*）、本質視（*Wesensschau*）、イデア視（*Ideation*）（『イデーニー』）をも含み、直観を個々（*individuell*）のものに限定し普遍的（*universell*）なものを抽象に委ねるような経験主義を批判し、逆に理性の働きを推論（*reasoning*）に限定するのではなく、理性による直観を認める。言うなれば理性的直観主義であった。また、この直観概念の拡張は、全体ないしゲシュタルトの直観（『論理学研究』）、メロディの直観（『内的時間意識の現象学』一九〇四）、対象と対象の「間（*Zwischen*）」ないし

空間の直観（『物と空間』一九〇七）へ繋がり、時間意識においては直観が瞬間の印象だけでなく（過去）把持と（未来）予持を含む「生き生きした現在」に広がるものであること、そこから、対象のみならず背景や地平の直観ないし地平志向性（『イデーニー』）へと、志向性概念を拡張することにも繋がって行った。

このようなフッサール現象学における「直観」概念の基本的な理解を踏まえて、本稿では、「直観と倫理」という与えられた課題について考察するが、その際、あらかじめ、①方法としての「直観」、②認識論における「直観」の役割、③倫理学における「直観」の役割という、「直観」が議論される三つの場面を区別しておきたい。①は直観主義や「あらゆる原理の原理」としての直観という場合の「直観」の場面、②は「範疇的直観」や「本質直観」という用語で語られる直観の場面、③は「倫理的あるいは道徳的直観」があるかという問いで問題になる直観の場面であり、「直観と倫理」という課題は主にこの③に関わると言つてよい。とすると、ここでは③だけを取り上げればよいようなものの、③は①②と絡み合っており、簡単に切り出すわけには行かない。絡み合っているが、いちおう区別できることを念頭に置きながら、論を進めて行きたい。

## 一 フッサール現象学における「直観と倫理」

考察の出発点として取り上げたい文献がある。それは、若きレヴィナスの博士論文で、若きサルトルに影響を与えたことでも有名な『フッサール現象学の直観理論』（一九三〇）<sup>(3)</sup>である。これは、その後の「倫理学こそが第一哲学だ」とする『全体性と無限』（一九六一）などの著作への最初の一步となった作品とも言える。以下、少し本書の内容をかいつままで紹介しておく。

同書のレヴィナスは、フッサール現象学における「直観」を高く評価するとともに根本的な批判を加えている。「直観がわれわれを存在者と接触させる」のであり、「直観によって体験（ *vécu* ）はすべての存在者が構成される場所として、それゆえ、志向性をもつものとして提示される」と述べ、「フッサールは、意識の存在の核心に、世界との接触を置いた」と、フッサールの「直観」概念を高く評価する。しかし、と同時に、「ところが、彼の現象学は認識論から解放されていないために、主知主義に汚染されていた」と鋭く批判する。ここでは「理論の優位性」が支配してしまっている、と言うのである。

この評価と批判は、フッサールがその師ブレンターノから継承した二つのテーゼに関わっている。一つは、「聞かれるものなしに聞くことはなく、信じられるものなしに信じることはな

く、希望されることなしに希望することはなく、得ようと努力されるものなしに努力はなく、喜ばれるものなしに喜ぶことはない」という〈志向性テーゼ〉であり、もう一つは、「作用は、一つの表象か、あるいは一つの表象に基づいているかのいずれかである」、「初めに表象されているのでなければ、何ものも欲せられることはできず、何ものも喜ばれることはできない」という〈基づけテーゼ〉である。

『論理学研究』は、この二つのテーゼをそのまま継承するところに成立していた。したがって、「志向的体験はすべて、客観化 (Objektivierung) 作用であるか、あるいはそれを基礎としてもつかの、いずれかである」(『論理学研究』)と〈基づけテーゼ〉に忠実に従っている。レヴィナスは、これこそが「客観化作用、すなわち理論的作用の優位」の元凶として批判する。

ところが、同時に『イデーンI』のフッサールは、「非理論的意識の現象学」に踏み込んでいるという。つまり、『論理学研究』では、「評価する (Werten)、意志する (Wollen) は、そのうちに一つの表象する (Vorstellen) をもっている」としていたフッサールが、『イデーンI』では、「感じることや意志することも含めて、あらゆる作用は「客観化」作用であり、対象を根源的に「構成する」ものである」として、「表象する」ことに基づくことなく、それだけで「対象を根源的に「構成する」」、つまり「評価する」作用において端的に「価値、美／醜、優／劣、日用品、芸術作品、行為などが構成される」と言うの

である。

レヴィナスによれば、『イデーンI』では、「非理論的作用も理論的作用と同様に新しい対象を構成すること」を主張することによって、『論理学研究』以来の〈基づけテーゼ〉を放棄しており、「価値の世界との接触は、それを理論的に認識することではない」と考えられるようになった。しかし、レヴィナスの博士論文は、そのようなフッサール現象学の変貌のなかに「直観と倫理」問題への示唆を見るにとどまっている。「フッサールの現象学は認識論から解放されていないにもかかわらず、認識論の枠をはみ出て(越えて)」おり、「具体的な生 (le) のうちに存在の位置を求めている」と、その動揺をこそ評価する。こうして、「実践的生と美的生も志向的性格をもち、それらによって構成された対象も存在の範疇に属する」と主張しながらも、レヴィナスは同書を次のように締めくくっている。「フッサールの思想における難点あるいは動揺を超出する可能性そのものは、実践的生および価値論的生の志向的性格の主張とともに与えられているのではなからうか」と。「直観」と「倫理」の繋がりをフッサール現象学のなかに見ようとしたレヴィナスは、求めたものを得られない不満を抱えたまま、同書を終えていた。

## 二 フッサール倫理学の出発点

レヴィナスの『フッサール現象学の直観理論』(一九三〇)は、それまでに刊行されたフッサールの限られた文献に基づいて執筆されていた。彼が同書で参考文献として挙げているものは、『算術の哲学』(一八九一)、『論理学研究』(一九〇〇/〇一)、『イデーニー』(一九一三)、『内的時間意識の現象学』(一九二八)、『形式的論理学と超越論的論理学』(一九二九)であった。これだけの著作から、前節で紹介した洞察を得ただけでも瞠目に値するが、それは逆にレヴィナスがフッサールの倫理学的作品をまったく知らなかったということを意味している。一九三八年にフッサール文庫が設立され、フッサールの草稿の編集が始まり、一九五〇年から『フッサール全集』の刊行が始まり、現在四一巻まで刊行されており、そこには生前には未刊の草稿も収録されているが、そのなかに含まれているいくつかの倫理学的著作(講義草稿も含めて)について、レヴィナスはまったく知らなかったわけである。

もともと数学畑出身で、そこから論理学に関心を広げ、論理学と心理学の関係から哲学へと関心を深化させたが、最後まで数学や論理学への関心を失わなかったフッサールであるから、あまり倫理学には関心をもたなかったのでは、という印象をもつ人も多いかも知れないが、実は、倫理学に関する講義

をハレ時代(一八八七―一九〇一)はほぼ毎年、ゲッティンゲン時代(一九〇一―一九一六)は平均二年に一回、フライブルク時代(一九一六―一九二八)は、「自然と精神」『哲学入門』「論理学」『近世哲学史』「現象学的心理学」といったテーマとローテーションをするように「倫理学入門」の講義を二度行なった。『フッサール全集』には、ハレ・ゲッティンゲン時代の『倫理学・価値論講義』(一九〇八―一九一四)<sup>(4)</sup>とフライブルク時代の『倫理学入門』(一九二〇/二四年夏学期講義)が収録されている。<sup>(6)</sup>前者は、ブレントラーノ倫理学の影響下から、「超越論的」な問題設定に脱皮を遂げつつも、「静態的」現象学にとどまっていたのに対し、後者は、第一次大戦後の困窮状況下、一九二〇/二一年には学部長時代のさなか、フィヒテ『人間の使命』からインパクトを受けた演習・講演を行なうという背景のなかで、倫理学史を講じ、「発生的」現象学にも踏み込み始めた。以下、まず前者の内容を簡単に紹介しておこう。

フッサール倫理学の出発点は、「倫理的な懐疑と、倫理的原理の問いに学問的に答える必要性。正しい行為についての学問的な技術論(Kunstlehre)としての論理学」(Hua. 28, Nr. 1)にあり、その意味で、「学問的な技術論」として論理学と倫理学を平行して考えようとしていた。そのなかで、フッサールの関心を特に惹いていたのは、「道徳の感情原理。ヒュームの道徳哲学との対決」(Hua. 28, Nr. 2)であった。彼は、道徳を感情(ヒュームで言えば「共感(sympathy)」)に基づけようとする考

えに對して、こう反論している。「倫理的判断が感情に基づいているとしたら、どうやってわれわれは、倫理的によい／悪い」とか、「正／不正」ということについて争うことができるのか。というのも、感情や趣味については争うことができない（*de gustibus non disputandum*）のだから。客観的な正当性というところがないとしたら、倫理的なものについての争いには意味がないことになろう」と。しかし、他方で、それでは道德を推論に基づけようとする考えに對して組するのではなく、両者の間で「何がよく何が悪い」という洞察（*Einsicht*）、「私たちのうちに呼び覚まされる道德的直観（*Intuition*）」を認める道を探ろうとしていた。

それが、フッサール倫理学のもう一つの出发点となった「カント倫理学の批判」（*Hua. 28, Nr. 3*）となる。この時期のフッサールは、カントの著作から多くを学び始めていた時期であったが、カントを内側から批判することで越えて行こうとしていた。そういう背景から、「カントにおいては、あらゆる質料の排除によって、形式のみが意志の規定根拠にならねばならない」と、その形式主義を批判するとともに、「私たちは、倫理学を下から始めなければならない」と、カントに抗して直観主義を主張していた。その意味で、「前批判期には感情道德に近づいていたカントは、批判期には理性主義に戻り、『実践理性批判』では、『構築的な理性主義倫理学』となり、『上からの超理論的証明』となった」とカントを批判している。さらに、

「感性と理性というカントの対比は誤りであり、カントが感性と呼ぶ領域にも、アプリアリな本質法則性が支配している」と批判する一方で、「しかし、カントは義務概念によってあらゆる相對主義を克服し、実り豊かな継承可能性を開いた方向を示した」と、その意義も認めている。

もう一点、フッサール倫理学の出发点を挙げるなら、その基本的な狙いは、学問的に基礎づけられた倫理学によって懷疑主義・相對主義・主観主義を反駁することにあった。そのためにこそ、フッサールは、論理学と倫理学の間のアナロジーを主張し、論理学における心理学主義批判と同様、倫理学における心理学主義も反駁しようとした。その議論は、その意味で『論理学研究』の延長線上にあり、ブレントラーノから学んだ前述の〈志向性テーゼ〉によって、「評価する（*Werten*）」ことの主観性を認めつつも、「価値（*Wert*）」そのものの客観性を確保しようとした。そして、それによって、ヒュームの感情道德すなわち經驗主義的倫理学（フッサールは、ギリシア神話にならって「カリュプティス」と呼ぶ）とカントの悟性道德すなわち理性主義的倫理学（同様に、「スキュラ」と呼ぶ）との対立（二つの恐ろしい怪物）のあいだをすり抜けることが、フッサールの目指したところだった。そして、前述のように、『論理学研究』では、客観化作用と非客観化作用の区別と前述の〈基づけテーゼ〉に固執していたが、『イデーニー』ではそれを放棄し、価値が「二次的な対象」であれ、「新しい次元」に属するとしたのも、

前述の「私たちのうちに呼び覚まされる道徳的直観 (Intuition)」を認めようとする方向に向かっていたと言える。

この時期のフッサール倫理学について最後に触れておきたいのは、『倫理学・価値論講義』の「意志の現象学」の章(一九一四)である。『論理学研究』『第一研究』で〈言語の志向性〉から出発した彼の志向性理論は、『イデーニー』では〈知覚の志向性〉へと発展していたが、ここでは、〈意志の志向性〉を考察することによって、さらに一歩進めようとしている。彼は、「意志が向かうことができるのはイデアルなものではなく、ただレアルなものだけであり、過去のものではなく未来のものである」と述べる。レアルなものに向かう点では、(外的)知覚と共通するところもあるが、現在に向かう知覚(知覚は「現在化 Gegenwärtigung」とも呼ばれる)、過去に向かう想起とも異なり、未来に向かう点においては期待と共通するところがある。しかし期待とは異なり、「未来に向けられた意志は、ある意味では創造的な志向であり、この志向は実行する行為 (Handlung) のなかで「充実される」と言う。〈知覚の志向性〉に対して〈意志の志向性〉は、次のように特徴づけられる。「通常の知覚は受動性の性格をもつのに対して、ここ現れる知覚は、創造的な主観性から湧き出る行為という性格をもっている」と。かくして、「意志の現象学」は志向性概念を変容させ、「行為の志向性」という行為論を準備しつつあったと言えよう。

### 三 フッサール倫理学の展開

続いて、フライブルク時代の『倫理学入門…一九二〇/二四年夏学期講義』の本稿に関わるいくつかの点を簡単に紹介したい。この講義の特徴は、体系的導入から倫理学史的考察へと進んで行ったところにある。その倫理学史は、必ずしも網羅的ではなく、関心のあるところだけをピックアップした印象を免れないが、それでも丹念に学史史を追いながら、自らの主張を展開している。

その倫理学史をざっと流れだけ追うなら、彼は、古代ギリシア・ヘレニズム時代の快樂主義を踏まえた上で、近代のホップス倫理学の快樂主義的な懷疑主義を論じ、徳を利己主義的な動機から導こうとする功利主義(ラメトリーとヘルヴェティウスから、マンデヴィルとベンサムへ)と利他主義的な功利主義(ハートレイ、J・ミル、J・S・ミル)を論じ、徳の起源の連合心理学的理論に対する批判から、「精神的生の根本法則」としての「動機づけ」の考察をしている。そして、悟性道徳(カドワース、クラーク)と感情道徳(シャフツベリ、ハチソン)の対立から、ヒューム倫理学とカント倫理学との対決へと辿り、「個々人の普遍的理性的な自己統制に立ち返る生としての最も可能な生の倫理学という構想」を、言わば「実存的 (existenziell) な倫理学」(『フッサール全集』第三七巻編者序文)を構想している。

ここでそれらを逐一追っていく余裕はないので、まずは、その議論の流れのなかで使われている「価値覚 (Wertnehmen)」という用語に焦点を当てることにしたい。そこに、前述したフレンターノから継承したテーゼの問題が現れているからである。まずは、快樂主義批判に適用された「志向性テーゼ」として、

「快樂という」感情は主観的だが、価値は客観的である「ことが主張される。つまり、「価値を評価する感情と価値そのものとの間には根本的な差異がある。評価することは何か時間的にやってきて過ぎて行くものであるが、「評価される」価値は永遠の時間を越えた本質の価値として何か永遠のものである」と言う。と同時に「基づけテーゼ」の放棄が、この「価値覚」という用語に現れている。つまり、ここでは、「知覚すること (Wahrnehmen) と価値覚すること (Wertnehmen) — 価値そのものを捉え感ずること (Fühlen) — の平行性」が主張され、知覚に基づいて価値覚が行なわれるわけではなく、両者が同じレベルの直接性をもつことが主張されている。「価値覚」という語によって、価値を捉えることが、価値と根源的に接触する場である一種の「直観」として捉え直されている。

次に取り挙げたいのは、利己主義と利他主義をめぐるフッサールの議論である。ホッブスを倫理的な懷疑主義としての快樂主義として批判することから出発したフッサールの近代倫理学史の見方としては、功利主義と直観主義という対立の構図ではなく、経験主義の感情道徳と理性主義の悟性道徳の対立という

構図が描かれ、さらに経験主義の流れを汲みながら、自己愛の原理に基づきつつ普遍的な福利の調和を求める功利主義の内部に、利己主義 (Egoismus) と利他主義 (Altruismus) の対立という構図を描きつつも、両者をいずれもヒューム以来の連合心理学に依存したものとして退けている。それらは、自然科学と精神科学の区別からすると、自然主義に汚染されることで、精神的なものとその発生の固有なものを見誤っていると診断され、それゆえにこそ、精神科学的な現象学的心理学の必要が主張される。

そのような現象学的心理学のなかで、精神的存在と動機づけについて、「あらゆる精神的なものに固有な本質は、志向的体験の主観、人格的 (Personale) な諸主観に連れ戻される」(104) とか、「これら主観は、その『環境 (Umwelt)』と相関的に発展する。……主観性は、その受動的および能動的な意識生のうちでその環境を構築し、……このプロセスにおいて同時に自我が人格として発展する」(105) とかと主張される。そこから更に、「精神性のうちに、本質的に互いに関係しあっているため、互いに分離できない二つの段階がある」(110) と述べ、「低い段階は純粋な受動性の段階であり、純粋な受動性は心的なもの、無我的なもの、すなわち能動的な自我の関与なしに経過する基礎の性格である。意識は自我なしにも経過することができる。低い、自我より低い意識領野において、まったく受動的な仕方では、発生が経過する。ここではすべてが自ずから生じ

る」(ibid.)と言われる。この辺りの議論は、現象学的心理学に關係するとともに、発生的現象学を踏まえた倫理学的考察となっている。<sup>(10)</sup>

ここまで、「直観と倫理」というテーマを軸にフッサール倫理学の展開を追ってきたが、彼が『イデーニー』で超越論的現象学へ踏み出した時、実は、直観主義はすでに足元から掘り返されていた。前述の「あらゆる原理の原理」を述べた直後、懐疑的な問題に無頓着に事象に直進的に向かっている独断論的態度に對して、事象の与えられ方の根拠を認識論的に問おうとする哲学的態度を對置させ、続く章では、世界に對する自然な態度とそれを働きの外に置き世界を括弧に入れる現象学的態度への還元を主張し始める。ここでは、自然な態度においては「直観する」と思われていたことが、超越論的には「構成される」(sich konstituieren)のものであり、その隠れて働いている働きを説明することが課題となる。しかも、ここでは静態的に構想された「構成」のあり方が、やがて一九二〇年代からは発生的に考察されるようになる。ここで、カント的な感性と悟性の二元論を越えた「受動的綜合」の分析によって、それまで端的に直観と呼ばれていたものを背後で支えている構造が明らかにされ、英国経験論から継承した連合も「受動的綜合」として説明され、同時に、フロイトの精神分析が無意識と呼んだ深層の働きの説明にも切り込もうとしており、直観の背後に隠されたものの解釈こそが問題となっている。<sup>(11)</sup>しかし、こうした発生的現

象学の考察が、『倫理学入門』講義で十分に展開されていると  
は言いがたい。

最後に、もう一度、同講義録に立ち返り、これまでの考察を背景にしながら、フッサールが「真の人間と人間共同体の理念」について述べている箇所をフッサール倫理学の展開の一つの山として紹介しておこう。

「私たちが人間共同体の人間自我を考えるやいなや、ただちにあらゆる人間に個々に属している個々の理念とあらゆるこれら人間の個々の自己規定とが驚くほど絡み合っていることを予感的に見て取る。というのは、私にとって他者があり、我にとって汝があるように、自分自身を求めその自分自身についての明晰さに至る目標を實現しようとする個々人の目標は、他者を求め、他者がその真の自己に至るのを実践的に助けようとする目標を或る仕方では必然的に含んでいる。言い換えれば、真の自己を愛し求め覚醒し作り出すこととしての真の自己愛の目標には、隣人が自己を求め自己自身を形成することに於いて他者を助けて奉仕する真の隣人愛の目標が含まれている」(241)。

こうした箇所ではフッサールは、これまでの倫理学的考察の延長線上で、私と他者、我と汝、利己主義と利他主義、他者を助けることの意味といった問題圏域を不十分ながら考察している。<sup>(12)</sup>



## 四 フッサール倫理学が残した課題

このようにフッサール倫理学には、検討に値するものが多く含まれているように思われるが、同時に、そこには残された課題もまた見えてくるように思われる。そのうちいくつかの点を確認しておこう。

フッサールの倫理学は、「個人主義的倫理」「個人倫理」であるという批判は、フッサール現象学を独我論的、独自の、等々と呼ぶ批判と同じほど多く、広まっている批判であろう。例えば、前述(注6)『改造』論文について、その「革新(Erneuerung)の倫理学」は、「個人主義的(personalistic)であり、他者(other person)は二次的役割しかもたない」という批判ももっともなところがある。フッサール自身、「倫理学は個人倫理(Individualethik)と社会倫理(Sozialethik)を含む」と述べているにもかかわらず、そこで実際に展開したのはほとんど個人倫理にかかわる議論のように思われるからである。あるいは、「社会倫理」を論じるときも、結局は「高次の人格」として個人との類比において論じるにすぎないのではないか、とも思われる。要するに、「人と人の間の関係」「間主観性」の問題として倫理学を論じてはいないのではないか、という疑問は否定しがたい。

そこから振り返ってみると、前述の「意志の現象学」も、確

かに「行為の現象学」へと歩を進めており、ここでは、志向と充実を含む志向性の概念が、行為における志向と充実へと展開している、とは言えよう。しかし、その行為論は、詳しく見るとやはり、何か物的なものに関わる(何かを實行して作り出す)行為(プラクシスであるよりポイエシス)にとどまり、人(他者)にかかわる志向的行為(例えば、「ケア」という行為)や、そうした行為に特有な志向と充実のあり方という考察にまで進んで行っていないように思われる。結局、他者にかかわる行為の現象学がそこには欠如しているのではないだろうか。先に紹介した利己主義と利他主義の考察や、共同精神や人間共同体の考察は、そこへの手がかりを与えてくれてはいるが、十分なものはとても言えない。

その点でも、フッサール倫理学には「間主観性の現象学」との接点が薄いように思われる。ちなみに、レヴィナスは前述の博士論文で、次のように書いていた。「これまでに公刊されたフッサールの著作は、間主観的還元については短い示唆をしか行なっていない。しかしながら、われわれが知っているところと信じるところによると、この問題に大いにフッサールは腐心した。……まだ公刊されていないこれらの論著は、きわめて大きな影響を及ぼしたのであるが、公刊される前にそれらの論著を利用することはわれわれに許されていない」と。周知のように、その後、レヴィナスが期待していた未刊草稿を編集した『間主観性の現象学』全三巻<sup>14</sup>が刊行されたが、そこで扱われる

問題群とフッサール倫理学との接点は、わずかに垣間見られるものの、<sup>(15)</sup>両者を繋げて行くのは容易ではない。

また、フッサール倫理学は「生活世界」論との接点も薄いように思われる。最晩年の『危機』書（一九三六）に出てくる「生活世界」論が、その萌芽としてはかなり早い時期（一九一六年頃）にまで遡ることは突きとめられてきたが、その後、『危機』書補遺の巻や「生活世界」に関する草稿が集められた巻も出版されたものの、そこで扱われる問題群とフッサール倫理学との接点についても、『倫理学入門』一九二〇／二四年夏学期講義の補論「自然と精神」から示唆されるところはあるものの、両者を繋ぐのも容易ではない。これらは、フッサール倫理学の残された課題と云うべきであろう。

最後に、もう一度だけレヴィナスの博士論文の或る一節を引いておこう。

「われわれの生の本有的意味を尊重するためには、知覚の世界の存在に或る優位を与えなければならぬ。／しかし、ここでもなお、フッサールに対してその主知主義を咎めることができるだろう。存在論的秩序においては、科学の世界は、具体的に漠然とした知覚の世界よりも後のものであり、知覚の世界に依存しているという非常に深遠な思想に、フッサールが辿り着いたとしても、彼はこの具体的世界を何よりもまず知覚された諸対象の世界とみなすとい

う点でおそらく誤ったのである。現実面に面したときのわれわれの最初の態度は、理論的な観想の態度であろうか？世界は、その存在そのものにおいては、ある活動中心として、あるいはハイデガーの言葉で言うならば気遣い（*Ge-richtetheit*）の或る領野として、現れるのではなからうか？」

ここでは、科学の世界に知覚の世界を対置させたフッサール（「イデーニー」）を評価しつつも、その主知主義への傾きを指摘し、具体的世界は理論的観想の一種にすぎない知覚の世界ではなく、むしろ『存在と時間』（一九二七）のハイデガーが「気遣い（*Geirung*）」と呼んだ実践的行為の世界ではないかと問うている。フッサール倫理学のなかにも、そうした方向に向かう道を探ることができるが、それは彼自身がかつきりと描いたことではなかった。現代の倫理理論のなかで「原則の倫理」をめぐる義務論と功利主義の対立、直観と功利の対立のなかで伝統的な「徳の倫理」が見直され、フッサール倫理学もこれに倅さすものと見る論者もいるようであるが、筆者自身は、むしろ、フッサール倫理学が他者との間主観的な行為論を通じて「ケアの倫理」に繋がるような「ケアの現象学」への道を探りたいと考えている。<sup>(19)</sup>

## おわりに

「直観と倫理」というテーマは、若きレヴィナスがフッサール現象学を評価しつつ批判した論点を表していた。その後、レヴィナスが参照できなかったフッサールの倫理学的著作でも、「直観と倫理」はさまざまな文脈のなかで論じられていたが、それは必ずしもレヴィナスが期待した方向にはなかったし、そもそもフッサール倫理学が「直観と倫理」という枠組みで捉えられるものでもなかった。フッサール倫理学は、必ずしも十分に展開されているとは言えないが、「現象学的心理学」「発生的現象学」「自然と精神」「間主観性」「生活世界」といったフッサール現象学の問題群を扱う未刊草稿が続々と刊行されるなか、これら問題群との関連のなかで再検討されねばならないだろう。<sup>(20)</sup>

## 注

- (1) 本稿は、関西倫理学会第六四回大会(二〇一一年一〇月三〇日、関西大学)シンポジウム「直観と倫理」での報告に基づいて執筆された。報告要旨という制約上、引用等出典の頁数は割愛した。
- (2) 英語・仏語では「直観」を意味する語に“intuition”しかないが、独語には“Intuition”と“Anschauung”とがある。前者を「直感」、後者を「直観」と訳し分けて、その微妙なニュアンスの違いを主張する向きもあるかも知れない。フッサールも傾向としては①が“Intuition”を、②が“Anschauung”を当てているようにも見えるが、必ずしもそれほどはっきり使い分けてはこない。
- (3) Emmanuel Levinas, *La théorie de l'intuition dans la phénoménologie de Husserl*, F. Alcan, 1930. マルティナス「フッサール現象学の直観理論」(佐藤真理人ほか訳、法政大学出版局、一九九一年)
- (4) Edmund Husserl, *Vorlesungen über Ethik und Wertlehre* (1908-1914), Hua, 28, 1988.
- (5) Ders., *Einführung in die Ethik, Vorlesungen Sommersemester 1920 und 1924*, Hua, 37, 2004.
- (6) はかに、日本の雑誌『改造』に投稿され、ドイツ語版として *Aufsätze und Vorträge 1922-1937*, Hua, 27, 1989 に収録された。いわゆる『改造』論文(未発表も含めて五本)が挙げられる。
- (7) 吉川孝「志向性と創造——フッサールの意志の現象学」(『倫理学年報』第五四集、二〇〇五年、所収)参照。同論考は、その後、吉川孝「フッサールの倫理学」(知泉書館、二〇一〇年)に収録されたが、本稿では執筆直前に刊行された同書を参照できなかった。
- (8) これは、「知覚する(wahrnehmen)」をまねて作られたフッサールの造語で、通常の語ではない。
- (9) こうした観点から「現象学的心理学」という課題が重要と

- なる。Vgl. Husserl, *Phänomenologische Psychologie, Vorlesungen Sommersemester 1925*, Hua. 9, 1968.
- (10) 発生の現象学を踏まえた倫理学的考察については、山口一郎『人を生かす倫理——フッサール発生の倫理学の構築』（知泉書館・二〇〇八年）参照。
- (11) Vgl. Husserl, *Analysen zur passiven Synthesis. Aus Vorlesungs- und Forschungsmanschriften (1918-1926)*, Hua. 11, 1966. 本稿『エッセンスの呼びかけ』は拙稿『たがひたがひが、及ばなかつた』。
- (12) こうした問題については、拙稿『ビジネス・倫理・ケア』（『西日本哲学年報』第一七号、二〇〇九年）を参照されたい。
- (13) サラ・ハイナマー「フッサールの革新の倫理学」（『現象学年報』二四、二〇〇八年、所収）。
- (14) Husserl, *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität. Texte aus dem Nachlass*, Hua. 13-15, 1973.
- (15) 例として「共同精神（Gemeingeist）」巻（Hua. 14, Nr. 9, Nr. 10）等々参照。
- (16) Vgl. Manfred Sommer, “Einleitung: Husserls Göttinger Lebenswelt”, in: Husserl, *Konstitution der geistigen Welt*, Felix Meiner, 1984.
- (17) Husserl, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie. Ergänzungsband, Texte aus dem Nachlass 1934-1937*, Hua. 29, 1993.
- (18) Ders., *Die Lebenswelt. Auslegungen der vorgegebenen Welt und ihrer Konstitution: Texte aus dem Nachlass (1916-1937)*, Hua. 39, 2008.
- (19) 科研による共同研究「ケアの現象学の基礎と展開」（代表：榊原哲也・東京大学）の成果の一部として拙稿「ケアの現象学への途上で」（『メタフィジカ』第四二号、二〇二二年）参照。
- (20) Janet Donohoe, *Husserl on Ethics and Intersubjectivity*, Humanity Books, 2004; Joaquim Siles i Borrás, *The Ethics of Husserl*, Continuum International Publishing Group, 2010 等々こうした試みが見られる。（はまうず しんじ・大阪大学）